

大木町・大溝小で省エネ授業

02年
1月17日
第4日



中村助教の質問に答える5年生児童

「40年後の日本は不便に」

中村・長崎大助教

大木町前牟田の大溝小学校(高柳政校長、424人)で16日、省エネルギーを学ぶ授業が始まった。第1回は長崎大学環境科学部の中村修助教(44)が「省エネを学ぶことの意義」を児童に話した。2月27日まで4回の授業がある。

省エネ授業は今年で3回目。地元環境ボランティア団体「あすくらら」(荒木フサ工会長、約80人)が自分たちの学習のため、中村助教を講師に呼び、その場で回校が取り組み始めた。毎年、中村助教とあすくららの協力も得て、5年生に教えてい

地元環境グループも協力

授業は「40年後の日本の生活」というテーマであった。まず児童らが、さまざまに便利になった生活を予想。それに対し、中村助教は「私の研究では40年後、今より電気を使ったり車に乗ったりができなくなります」と話した。未来が不便になる原因として挙げられた地球全体の人口増や石油エネルギーの枯渇について、児童たちは資料を使って確認していた。

省エネ授業は今後、あすくららの省エネ実践法を聞く▽家庭で取り組んだ省エネ実践を児童が発表▽町職員や議員の省エネの取り組みを児童が聞き取り調査する――がある。

【近藤聡可】

毎日新聞 2002年1月17日

省エネ対策の
実践結果報告
大木町の大溝小
大木町前車田の大溝小
で6日、5年生約八十人



が自ら実践した省エネ対策の結果を報告した写真。

地元環境ポータルサイト「あすくら」の協力で三年前から取り組んでいる省エネ授業の一環。この日は、児童が自分の家庭の電力使用量を調査、二週間の使用量から無駄な消費の原因を考え、三週間目に家族と省エネに取り組んだ結果を報告した。「テレビゲームの時間を減らした」「別々のテレビで同じ番組を見るのをやめた」など現代らしい対策もあり、多くが省エネに成功。家庭での実践を通して節約の大切さを学んだようだ。

その後、「あすくら」会員らが、自ら実践する省エネ法を紹介。五人家族で電気代を毎月三千円前後に抑えているという自然省エネのノウハウの田中兼和子さんごからは「我慢する必要はなく気軽に取り組んで」と助言していた。

朝日新聞

2002. 2/8

ゲームにエアコン我慢した

大木町の町立大溝小学校（高椋敬治校長）で、「省エネ授業」があった。5年生（3学級の82人）が、個々に立てた省エネ対策とその成果を発表し、全員で意見を述べた。保護者も参観に訪れ、3年目になる取り組みが、徐々に地域に浸透しつつあることがわかった。

徐々に地域浸透

児童は、1月中旬から3週間わたって調べた自身の電気消費量の変化を記した折れ線グラフを、OHP（図形や文字の投影機）で示しながら、テレビゲームの時間を減らしたり、エアコンの温度設定を低くしたりと、「我が家の対策」を紹介した。

消費量が着実に減る家もあれば、一度減った後で大きく増える家も。理由を尋ねる支那は、「夜10時までテレビを見ながら」と恥ずかしそうに告げる児童もいた。

児童たちは、自ら家族に協力を呼びかけたという。1月には準備書を抜き、数十年後は今のよ様な感覚で電気をふんだんに使えるわけではいじとを、石油資源の枯渇や地球人口の増加などの関係で学んだ。

発表後、5人家族で1カ月の電気代が3千円以下という町職員の田中兼和子さんが、温暖化現象を説明しながら「省エネ授業とは世界の人たちが幸せになるための授業」と語りかけた。

最後に省エネの取り組みを紹介する児童「大木町前車田で」

金曜日

寒月

森下

内田



省エネ体験 発表熱く

日 2/27 2002

町職員に質問する大溝小児童



省エネ一緒に取り組んで

家庭や校内で実践

大木町長に成果を報告

大溝小5年生

大木町前牟田の大溝小学校5年生が28日、町役場を訪れ、職員に省エネルギーへの取り組みなどを尋ねるインタビューをした。

5年生は先月、エネルギー資源の枯渇問題などを学び、その後、家庭で省エネ活動を実践。その方法や成果を父母参加で発表したり、校内に省エネを呼びかけるポスターを張るなどの活動をしてきた。

この日は省エネ授業の最終回で、81人が役場を訪れた。まず石川隆文町長に省エネ活動を報

告。子どもたちが「一緒に取り組んで下さい」と話す。町長は「皆さんの一人一人の活動が大事です。町でも生ごみをリサイクルしてエネルギーにする取り組みをやります」と答えていた。

その後、子どもたちは、職員たちに「役場では環境に良いことをしていますか?」「待機電力の燃味を知っていますか?」などと九つの質問をし、「あなたの点数は9点中7点です」などと省エネ点数を告げていた。児童たちは活動を、町議会の場でも発表したいと希望しているという。

【近藤聡司】

毎日新聞 2002年2月27日

役場の省エネを見せてください



省エネについて町職員に質問する児童たち

役場ではこの日、児童が三人一組になり、職員に質問。児童の「役場ではどんな省エネを」の問いに、職員は「昼休みの消灯、調りばし使用禁止、メモなどの薄紙使用」などを答えた。

同町は石川町長が資源循環型の町づくりを進め、環境をテーマにした町民団体の活動も盛ん。そのため、同小も省エネ授業に熱心。中村修・長崎大助教授(地域環境政策)から講義を受けてきた。学識経験者を学校に招いたり、児童の自宅では省エネ調査も。町役場訪問は、町に省エネを広めるための授業の仕上げ。

参加した中村修(10)は「地球の資源を守るためにも、省エネはいいこと。僕もやる」と話した。

大木町 小学生が聞き取り

三年前から省エネ授業を取り入れている大木町・大南小(高橋敬治校長)の五年生約八十人が二十六日、町役場など二か所を訪れ、石川隆文町長を始め、全職員約八十人から省エネの取り組みについて、初めて聞き取り調査をした。児童たちは「これからも頑張る」と、エールを送った。

読売新聞 2002年2月28日

<お知らせ>

- ① 環境行動実践ソフト『未来をつくる 省エネ編 ～省エネ発電所を建設しよう～』のCD-ROMと冊子を無料配布しています。送付をご希望の方は1,000円(送料)でお渡します。
- ② 今年度、秋に合同出版社から「地域を変える未来をつくる」シリーズの1冊として本を出版する予定です。

環境NPOの稼ぎ方

長崎大学環境科学部 中村 修

老化か成熟か

大学で学生に囲まれて生活していると、つい自分自身も若いつもりになってしまいますが、四四歳になってしまいました。大学の先生、NPOの社長、うちに帰れば三人の小さな子どものお父さん、これらを演じるのは大変です。

一昨日も過労で首が回らなくなってマッサージにいったばかりです。いまはゼミで議論しすぎて声がでなくなっています。歳をとると、疲れがきちんと体にでます。

でも、歳をとったのはわたしだけではありません。いろんな市民運動の現場には必ず学生を連れて行きますが、「中村さんは若い人に囲まれていいねえ」という会話が必ず出るほど、どこでも老齡化は進んでいます。

気持ちは若く、志はアウトローなのでしょうが、もはやかつてのハードな活動をおこなう体力は残っていきそうにない人たちばかりです。

ひとしきり話が弾んだ後は「後継者が育たない。若い人がいない」という、まるで農村の会話のようです。

では、若い人たちからしっかりした活動が展開されているのか、といえは、どうもそうではなさそうなのが辛いところです。アンテナは広げているつもりですが、昔の運動の真似をした学生の集まりを見かけることはあっても、そこで議論されていることや活動の中身は、昔の市民運動のコピーばかりです。老齡化した市民運動を越えるパワーや、手法はここには感じられません。

各地での地域に根ざした活動、反原発、有機農業、いろんな場面で老化が進んでいます。

歳をとることは悪いことばかりではありません。「成熟」という意味もあります。市民運動は行政との対立だけから脱して、議員を当選させたり。行政と共同作業をやったり、ワークス

で起業をする、というのもやりました。

でも、肝心の中心活動そのものは成熟化せずに、アウトローのまま、なおかつ若い人の参加はほとんどありません。このままでは廃村になりかけた山村同様に、市民運動も自然消滅していくのかな、と考えています。

アウトローが悪い、と言っているのではありません。行政を批判する立場上、アウトローは避けられません。でも、ただただ批判するだけでいいのでしょうか。批判するために活動をするのではなく、よりよい社会を建設するために活動してきたのではなかったのでしょうか。

であるならば、少数者あるいは被害者の立場にたって得た視点を、ただ批判のために使って終わりにするのではなく、批判的視点を具体的な社会装置に埋め込む作業に取り組む必要があるのではないのでしょうか。

それが成熟、ということではないのでしょうか。

残念ながら市民運動が繰り返して訴えても、高級官僚（本当にいるのですよね）から地域の役人に至るまで、彼らは表面上は理解し得ても、本当に理解することは苦手のようです。それゆえ少数者の意見が行政に汲み取られて形（事業）になったときに、理念は跡形もなく消え失せています。

でも最近、それはしょうがないことだと思えるようになってきました。なぜなら、彼らには、センスがないのですから。

もし、本当にいい社会を少しでも形にしたいのなら、役人にまかせずに、市民運動が行政から委託を受けて理念を形にすればいいのだ、と思うようになりました。決められたルールに従ったことしかしないのが役人です。新しいセンスを受け入れるのは苦手です。

消滅かNPOか

大木町のあーすくらぶも各地の市民運動と同じ状況です。最近は若い人の参加はほとんどありません。

一度、あーすくらぶが大規模な講演会を開催したら、せっかく集まった若い人は新興宗教がかった環境活動のグループにからめとられてしまいました。彼らは高いお金をだしてセミナーに参加することで、環境にいいことをした、と思いきまされています。そして、地元の活動にはけっして参加しません。

あーすくらぶは、省エネ授業を三年間やってきましたが、ちょっと疲れてきました。五年間やってきたEM菌を使った生ゴミの堆肥化活動も、町の循環事業が動き出せば不要になります。町の面積の一六%も占めるクリークの浄化活動をこれからやりたい、と考えていますが、活動予算も人手も見えてきません。

先日、あーすくらぶの役員会に参加させてもらって、「NPO法人になって行政から仕事を委託してもらって持続的に活動しよう」と提案してきました。

「このままでは自然消滅は見えています」と付け加えましたが、素直にうなずかれてしまいました。

いまなら事務局をやってもいいという人もいます。町役場から省エネ授業やゴミ、環境に関する啓蒙事業を委託を受けてやる能力とセンスは十分にあります。クリークの浄化活動も行政職員がやるより、よほど安価に効率よくやることができます。

「覚悟を決めたら、NPO法人化、仕事の仕方を指導します。行政からどんな仕事がどれくらいの費用で委託されるかも、コンサルタントとして調査してあげます」と言ってきました。大木町役場が来年度、省エネビジョンをとって

くれれば、そのお金で市民活動のNPO化をやる予定です。

お金の計算から成熟へ

NPOといえば、福岡県宗像市から委託を受けたNPO法人がユリックスという公共施設内のプラネタリウムの運営をやっていました。ここは、最初は市が運営していましたが、業者に委託し、そして星が好きな市民に委託して運営してもらうようになりました。好きな人がやるのが一番ですよ。

さて、あーすくらぶの一足先に福岡県古賀市のエコけんはNPO法人格を取得しました。(ちなみに、このNPO法人化の手伝いを、うちのNPOがやりました。)

エコけんはプラスチックゴミの分別活動をやってきましたが、市民活動としてやるには作業は大変です。そこで、活動を縮小するか、思い切って展開するかと悩んだ末、NPO法人になりました。

エコけんは、いまでは市の環境政策に大きな影響力を持っています。ところが、事業者としてはまだまだです。活動が持続するということは、活動のためのお金を持続的に獲得する、ということです。

そこで、「例えば、 の仕事だったら、NPOとしてどれくらいのお金を要求する?」と聞いてみました。

「日当として二万円ほどかな」という答えです。

「じゃーん、間違いです」

個人が得るお金としては日当二万円はうれしい金額でしょう。でも、法人としては話になりません。安すぎます。NPO法人として、仕事の中身を企画立案し営業で獲得し、スタッフをその仕事に派遣します。事務所の家賃や電話代

も毎月支払わなければなりません。

現場から支払われるお金は、スタッフの仕事に対してだけです。それゆえ、日当は三~五万は要求しないとイケません。スタッフには一万円支払ってもピンハネではけっしてありません。事務所の費用や、それまでに使った営業、企画立案のスタッフの件費がここには含まれていません。

仕事とは、お金とはそんなものです。活動をきちんと継続し、行政や市民に責任を持つためにも、安く引き受けることは禁物です。それは活動が継続しないという意味で無責任だからです。

市民活動を社会装置として組み込んでいく必要があるとわたしは思っています。そのためには、法人格を獲得し、お金を使いこなす必要があります。

たったこれだけのことです。少数者に押しつけられた痛みには比べれば、たいした作業ではありません。

もちろん、他の多くの人たちと一緒に事業としてやっていくわけですから、最初から自分たちの理念だけを一〇〇%満足させることはできません。でも、役人がやるよりはましなことができます。そして、時間をかけて周囲からの信頼を得ていけば、より自分たちの理念に近い事業へと展開することも可能です。これが、市民活動の「成熟」した姿ではないかと考えています。

さて、大学の講義や会議では、好きではないのでけっしてネクタイはしめませんが、NPOの営業ではわたしは平気でネクタイをしめます。

学生にも現場に行くときはスーツやネクタイ姿で行くことを求めます。

はじめての人からは、まずは外見や形で評価されますから、信頼関係を得るまではしょうが

ない、と割り切っています。わたしがやりたいことが、ネクタイしめることで、ここで形になるなら、なんてことはありません。最近、きれいな色のスーツをみつけたので、とってもいい気分転換です。

循環起業

九月二一、二二日に大木町でアントロピー学会第二〇回シンポジウムを開催します。大木町は福岡県の久留米市と柳川市の間にあります。

テーマは未定ですが「循環起業 - 農と地域経済回復戦略としての循環」でいこうと思っています。

アントロピー学会でも、循環の理念は語り尽くされています。残るのは、循環をどのように地域で形にするかです。

循環をNPOが事業主体になってやっていこう、というシンポにしようと思っています。もちろん、各地のNPOの稼ぎ方を具体的に紹介します。

二二日は学校給食への地場産の産直というテーマでもやります。地場産農産物の購入も循環事業の目玉です。これは有機農産物を販売するビジネスとしてどうやったら売り込めるのか、買ってもらえるのか、という戦略を紹介します。細かな売り方まできちんとシンポでは伝えます。なにしろ、給食は一兆円産業です。給食に販売できれば、多くの有機農業の百姓が暮らしていきます。

地域経済をつくる道具としての地域通貨の実践例も紹介します。従来のサークル的な小さな集団内部でしか使えない地域通貨ではなく、町ぐるみで流通する地域通貨のアイデアも検討しています。

わたしはつくづく、商売が上手だなあ、と思います。

< 編集後記 >

今回の特集、いかがでしたでしょうか。私が1年以上前から取り組んできた省エネビジョンの分析評価、そしてアンケート調査がようやく形になりました。まだまだ不十分な点はたくさんありますので、さらに中身をよくしていかなければならないと思っています。これを読んで皆さんそれぞれにうなずける部分とそうでない部分があると思います。読者の皆さんからご感想がいただくと大変うれしいです。ここに至るまで協力してくださった方々に感謝します。ありがとうございました。

(編集: 木島)

地域循環情報

May.20.2002

Vol. 4 No. 2

編集: 木島 麻友香

発行: NPO 法人 地域循環研究所

編集連絡先: 〒852-8521

長崎市文教町1-14

長崎大学環境科学部 中村修

電話: 095-843-1633

FAX: 095-843-2033

尚、このニューズレターは HP にも掲載します

HP: <http://www.junkan.org/>
